

ラテン語とフランス語

古典作品を素材に [12]

ブルガータ訳聖書「エゼキエル書」より — 「預言」の受動性 —

秋山 学

今月は、再びラテン語ブルガータ訳聖書からテキストを選ぶことにしましょう。以下に掲げるのは、旧約聖書【エゼキエル書】第37章からの一節です。

原文 Facta est super mē manus Domini et ēdūxit mē in spīritū Domini et posuit mē in mediō campī, quī erat plēnus ossibus, et circumdūxit mē per ea in gyrō: erant autem multa valdē super faciem campī siccaque vehementer. Et dixit ad mē: « Fīlī hominis, putāsne vīvent ossa ista ? ». Et dixit: « Domine, tū nōstī ». Et dixit ad mē: « Vāticināre super ossa ista et dīcēs eis: Ossa ārida, audīte verbum Domini. Haec dīcit Dominus Deus ossibus hīs: Ecce ego intrōmittam in vōs spīritum, et vīvētis ». — *Ezechiel 37,1-5.*

仏訳 La main de Yahvé fut sur moi, il m'emmena par l'esprit de Yahvé, et il me déposa au milieu de la vallée, une vallée pleine d'ossements. Il me la fit parcourir, parmi eux, en tous sens. Or les ossements étaient très nombreux sur le sol de la vallée, et ils étaient complètement desséchés. Il me dit: « Fils d'homme, ces ossements vivront-ils ? » Je dis: « Seigneur Yahvé, c'est toi qui le sais. » Il me dit: « Prophétise sur ces ossements. Tu leur diras: Ossements desséchés, écoutez la parole de Yahvé. Ainsi parle le Seigneur Yahvé à ces ossements. Voici que je vais faire entrer en vous l'esprit et vous vivrez. »

訳 主の手がわたしの上に臨んだ。主はわたしを主の霊のうちに連れ出し、わたしを野の中央に置いた。その野は骨に満ちていた。主はわたしを、骨の間で一巡りさせた。骨は、野の面にとても数多く見られ、非常に乾いていた。主はわたしに言った。「人の子よ、これらの骨は生きるだろうとあなたは思うか?」。そこでわたしは言った。「主よ、あなたはご存知です」。主はわたしに言った。「これらの骨に対して預言し、それらに言うがよい。枯れた骨よ、主の声を聴け。主なる神はこれらの骨に言う。見よ、わたしはあなたの方の中に霊を送り込もう。するとあなた方は生きるだろう」

今回のテキストは旧約聖書ですので、ラテン語とともに、原典であるヘブライ語テキスト、およびギリシア語訳旧約聖書を参照しましょう。注目したいのは、vāticināre

という動詞形です。この活用形は vāticināri という不定詞形を持つ動詞（「預言する」）の2人称単数に対する命令法現在形です。この動詞は、活用のタイプとしては、能動相で -āre という不定詞語尾を持つ第1活用に分類されます。ただしこの vāticināri には能動相の活用形が存在せず、「形式受動相動詞」（「能動相欠如動詞」と呼ばれます。

ところで、この部分のヘブライ語原文は hinnābē' という語形になっています。これは *nābā'（「預言する」）という動詞の2人称単数男性に対するニフアル態の命令形です。セム語の文法用語に面食らわれたかも知れませんが、概説しますと、ヘブライ語には通常の動詞活用（「バアル態」）を初めとして7つの「（話）態」が存在し、バアル態とニフアル態は、ほぼ能動と受動の関係にあります。ただしちょうどラテン語の「形式受動相動詞」と同じように、バアル態がなくニフアル態に活用するタイプの動詞があり、この *nābā' もその一つと見なされます（ちなみに「預言者」は nābī' です）。

いまヘブライ語文法はさておきとして、なぜラテン語に「形式的受動相動詞」が存在するのか、その理由をめぐり、ギリシア語に遡って考えてみましょう。ギリシア語の動詞には、能動・中動・受動という3つの相（態）が区別されます。このうち「中動相」というものは、ラテン語の活用形としては存在しませんが、概念的には、個人・共同体のレベルを問わず、ほぼ再帰的な表現に該当すると言えるでしょう（近代諸国語の再帰動詞ないし代名動詞に相当します）。ラテン語には、この「中動」という発想自体は潜在的に残存しているものの、そのための表現装置つまり活用形は、別途設けられることがなく、受動相の活用形に集約されてしまったという一面があります。逆に印欧祖語に近いサンスクリットでは、「中動相」に当たるものは「反射態」と訳されて「能動態」とペアを構成し、受動活用はむしろこのペアの外に置かれています。

ちなみに、この部分のギリシア語訳は προφήτευσον (profēteuson) です。この動詞の不定詞形は προφήτευειν (profēteuein) で、これらは能動相の語形です。なお προφήτευσον は、アオリスト命令法能動相2人称単数の活用形で、アオリストは仏語の単純過去に相当しますが、直説法以外では時制の観念は欠落し、アスペクトとして瞬時相を表します（2014年4月号参照）。もっともこの動詞は語源的に「(前に προ-) 語る」という意味を表し、「預言」が適訳だとも言えます（仏訳でも prophétise となっています）。その点、ラテン語の vāticināri が vātēs（「預言者」）という語彙を内包し、また「預言」とは「ある人が（神の）霊の道具として用いられ、語る」現象であると解するなら、「預言する」という動詞が受動相の形式を探ることも納得できますね。ヘブライ語動詞 *nābā' がニフアル態に活用するという点も、「神のこぼを預かる」という「預言」の受動性に照らせばよく理解できましょう。ラテン語の vāticināri は、「預言の受動性」を表すのにふさわしい動詞だと言えるかも知れません。

(あきま・まなぶ)